

種名 くり  
万葉時代の呼名 栗



詠人 高橋 蟲磨

万葉集卷九 一七四五

三栗の那賀に向へる 曝井の  
絶えず通はむ そこに妻もが

【現代訳】

那賀の方に向かって流れる曝井の泉が絶えることがないように、わたしも通い続けます。きっと佳い人がいるから…

【クリの解説】 ブナ科クリ属の落葉性高木

落葉性高木で、高さ17m、幹の直径は80cm、あるいはそれ以上になる。樹皮は灰色で厚く、縦に深い裂け目を生じる。葉は長楕円形か長楕円状被針形、やや薄くてぱりぱりしている。表はつやがあり、裏はやや色が薄い。周囲には鋭く突き出した小さな鋸歯が並ぶ。

雌雄異花で、いずれも5月から6月に開花する。雄花は穂状で斜めに立ち上がり、全体にクリーム色を帯びた白で、個々の花は小さいものの目を引く。また、香りが強い。非常によく昆虫が集まる。ブナ科植物は風媒花で花が地味のものが多いが、クリやシイは虫媒花となっている。9月から10月頃に実が成熟すると自然に「いが」が裂開して中から堅い果実が1~3個ずつ現れる。北海道西南部から本州、四国、九州に分布。国外では朝鮮中南部に産する。暖帯から温帯域に分布し、特に暖帯上部に多産する場合があります、これをクリ帯という。